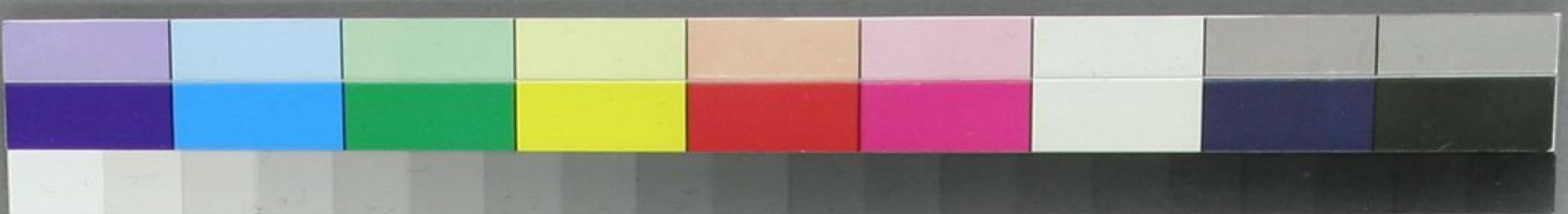


130 1 2 3 4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6



様啓今や残想未全退行深哉
の文 尊見而清學國家再
來の時、家に日夜非常の事務
仕質是事中多有為（西園寺重
松）院中情勢者新聞紙の
探報す所、多少誤謬也有、
是研究會の一部と業研究會の或
一部も又有る（西園寺重
松の如きは如何と云ふ障害の不
明以前、在英同士同志者の
内報等概ね其の想像を差はず
院の事情、能く以て注意せんが
内官省の事の常ニ前も後も考
察下すと、要如何、因申之、其の事
詳報せし新字派を擱け有
る是内官侍長の御寺儀が

（被詣直參事）（西園寺重松の原

解 析 せし 新野氏 まほ掲げ有し
と是れ由古所侍長也 ては 便寺侯が
(被謹直參事) 産高を詔請ひ候
詔付て云々の事の如きは 実も歎
大恩を懷し 由多を平々克 宗者へ
想模精神をもて 大義を持する
識とが為すより 王室の主國に
皇室の事と精神作用様て 既定法律
の進歩とお應せきる て あら え見す
大駕の内書と御内書と申是れを
ツミハ 宮内百般の如役役使等の事
不而ま候多し 一聲も極りて 通ぢ
至る處ひそく 帝御地閣する事す
而して 既隔う事亦至る難事す
まのあらん あすに今より 宮内事
二、三者もも益ひある て ひまも少々
積事の微末見も案頭の書缺
皇室の閑事より 退坐言ひ行ひ
行はれどもとは命をうけ方より 家
角是れ一度の宮内者の精神を遡り
方針より物を取扱ふを知らまし 律
意見の有り所と真一通 宮
乙夜質とまつて すなは起居中
有らぬ無是事とが當て 俗傳
聖恩と まつて 事と まつて 証ひ候年
以來日暮思慮し 皇室典範制
定前より御事中閑 一月をも

聖朝と國家の事も事何を報ひ治年
以來是夜思慮へ 皇臺興殿制
定前御事閣 一月書

由一叶の歌詠と表へ 息と百人
さよはるに思す そと雲錦蓋
すら向は極めて致みどり

尊見テ 何卒宇宙の政事國の事
き事と傳、主事のゆく今より
皇臺の古跡、物とは此時之傳
言より事と出されは、高麗中主
不直ひ羊山也あらま

宸廟と名號、ごとく自然と

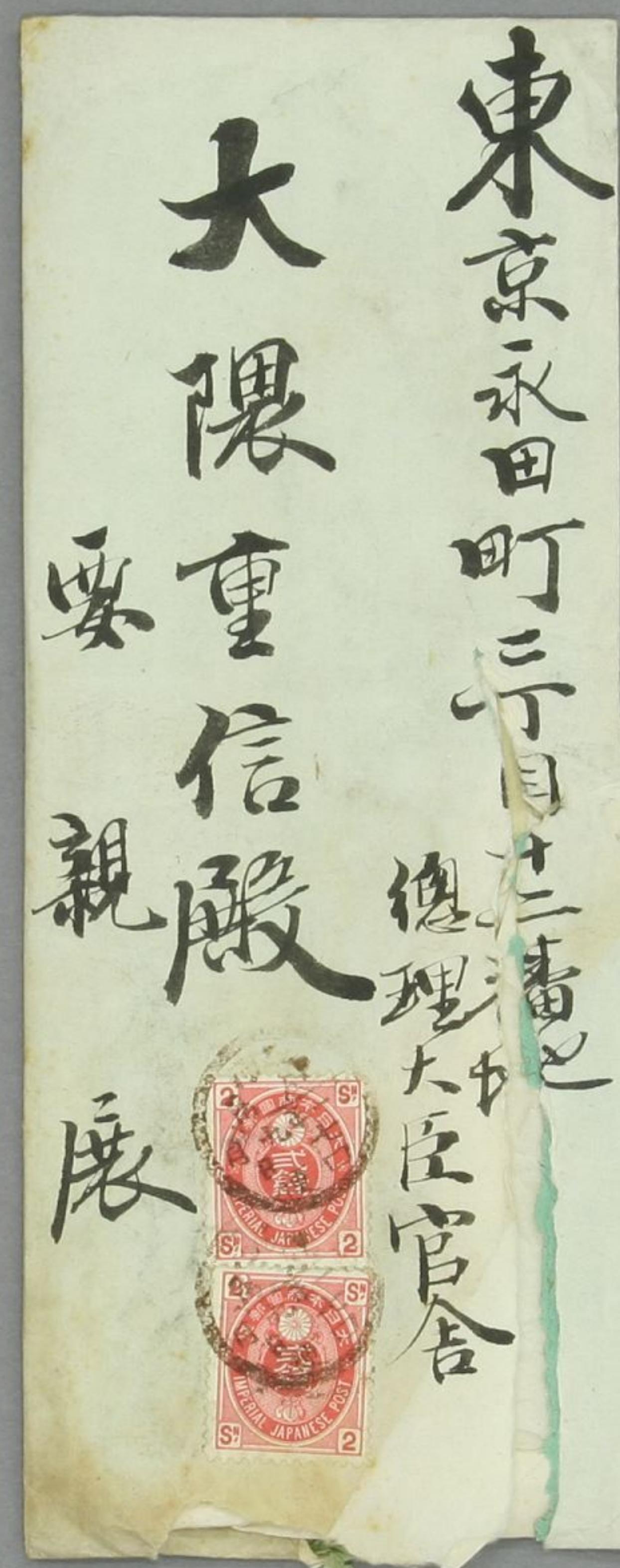
自天子の御尊嚴も出間すう申す
宮廟者の内勢ハ、中務院すとも一廢帝
の意が望む是れを一叶の歌詠
書ふ盡意の御納りと表ひ事
自天子の御尊嚴も出間すう申す
何承下利も、ノゾム、ノゾム、直に美後
五歳も、他見じて、角井野の歌い

九月六日

直林

大隈 大兄研究

130 1 2 3 4 5 6 7 8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4



絨

仇賀縣鹿鳴津川

鍋

萬

直

林